

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	白坂 彩乃
論文題目	世紀転換期オーストリアにおける〈精神的な愛〉の諸相 ——リルケ、ヴァイニングァー、ムーヅルを中心に		
(論文内容の要旨)			
本学位請求論文は、性の視点から論じられることの多い世紀転換期オーストリアの文学・思想を、〈精神的な愛〉に着目して解説する試みである。そのために本論文ではリルケ、ヴァイニングァー、ムーヅルという三人の詩人・思想家・作家が取り上げられ、プラトンに遡る〈精神的な愛〉の精神史に立脚したうえで、三者が世紀転換期に模索した愛の共通性と相違が明らかにされる。 序章では、プラトンの愛や宮廷風恋愛を踏まえて〈精神的な愛〉が定義される。論者によれば、〈精神的な愛〉の第一の特徴は超越性であり、いま現にある世界とは別の世界を求めるユートピア的志向性を持つ。第二の特徴は非・水平性であり、精神と肉体の二項対立によって肉体が否定され、現実の女性との間に水平的な関係を築くことができない。本論文でリルケ、ヴァイニングァー、ムーヅルは、〈精神的な愛〉の第一の特徴を継承しつつ、第二の特徴を各々の視点から批判した人物と捉えられる。彼らが女性を対等な愛の相手と見なし、女性との水平的な関係を模索していたことが、続く全五章の各論のなかで示される。 第一章ではリルケの〈所有なき愛〉の観念が、『マルテの手記』で語られる〈愛する女〉という女性類型の分析を通して検討される。リルケは愛の詩や書簡を書いた歴史上の女性たちを〈愛する女〉として賛美しているが、本章で指摘されるのはリルケの女性観の分裂である。〈愛する女〉はエロースの主体である「人間」である一方、神性の仮託された「自然」と見なされ、この分裂が〈所有なき愛〉の観念に影響を与えている。それを突きとめた論者は、リルケが「自然」の側面から評価したベッティナ・フォン・アルニムを、「書く」女性という「人間」の側面から捉え直すことによって、リルケ研究者の間でこれまで見解の分かれていた〈所有なき愛〉の解釈を整理すると同時に、「人間」としての〈愛する女〉が孕む可能性について言及している。 第二章はヴァイニングァーの『性と性格』に表れたプラトンの愛について論じている。一般には世紀転換期ウィーンのミソジニストとして悪名高いヴァイニングァーであるが、じつは性を斥けて愛を讃美するプラトニストであったと論者は言う。にもかかわらず彼がエロースを批判するのは、エロースの愛において男性は現実の女性に自身の理想像を投影しているのであり、それは女性を手段として利用する行為であるからだ、と。そうしたエロース批判にもかかわらず、ヴァイニングァーが女性へのエロースを最後まで捨てられなかったことも、論者は『性と性格』の矛盾した記述から読みとっている。 第三章ではリルケとヴァイニングァーの愛の観念が比較される。両者には自他の境界を尊重する「人間」同士の関係という共通点があるが、その内実には大きな隔たりがあると論者は言う。ヴァイニングァーが性に対する嫌悪から、愛の対象である「同行者」に「性のない女性」を求めたのに対し、リルケは女性を「自然」を体現した異質な他者で見なし、自然の法則に従う生殖としての性愛を許容する。ヴァイニングァーが「人間」としての同質性を強調するあまり、異質な他者に惹かれる心性としての愛を否定せざるをえなかったとすれば、男女の差異を認めていたリルケは、ヴァイニングァーの			

思考の徹底性を欠くことによって、結果的に素朴な性愛讃美に陥ったのである。

第四章では、ムージル『特性のない男』の公刊部と1920年代の草稿『双子の妹』に共通する神秘的な愛の物語を比較することで、性愛と神秘主義の関係が考察される。『特性のない男』は未完に終わったため、主人公ウルリッヒとアガーテの兄妹が今後近親相姦を犯すか否かという問題が研究者の大きな関心を集めてきたが、そこには〈精神的な愛〉一般を規定する精神と肉体の二元論があると論者は言う。そして、草稿では神秘的な恋愛体験が性交によって終わりを告げるが、『特性のない男』ではそのような結末を回避する動きがあることから、ムージルは精神と肉体の二項対立を止揚し、肉体を排除しない、だが通常の性愛とは異なる神秘主義的愛を模索していたのではないかと推論する。

第五章でもムージル『特性のない男』が考察の対象となるが、ここでは主に1930年代以降の遺稿部が検討される。遺稿部においてムージルは精神と肉体の対立を超えた、だがたんなる両者の融和に留まらない、濃密な官能を湛えた精神的な愛を構想するのだが、そのような、性交に代わる愛の身振りの探究を主導するのは、これまでの研究で十分に注目されてこなかったアガーテであるとされる。作中アガーテはウルリッヒの自己愛であると言われるが、論者によれば、生身の肉体を持つアガーテこそ、ウルリッヒにとって、〈精神的な愛〉の超越性を帯びつつも対等な愛のパートナーとしての水平性を持った人物である。リルケやヴァイニングが挑戦しつつも挫折した、自身と対等な愛のパートナー像を構想することに、ここでムージルは成功しているのである。

(論文審査の結果の要旨)

「世紀転換期オーストリア」における愛といえば、フロイトとシュニッツラーに代表される性と官能の町ヴィーンを連想する人がいるかもしれない。だが申請者はそこに〈精神的な愛〉という、性と官能の対極にある観念を見いだし、それを追求した人物としてリルケ、ヴァイニングアー、ムージルを選んだ。いずれも「精神と性」をめぐる圏域で独自の表現活動を行った詩人、思想家、作家であるが、この三者を〈精神的な愛〉という観念のなかに相互に位置づけるのは一見困難に思える。だが申請者は、ヨーロッパの愛の精神史を展望し、そこから〈精神的な愛〉の一般的指標として、現実を超えようとする「超越性」と女性を対等な愛の相手と見なさない「非・水平性」という二つの特徴を抽出する。そして、それを手掛かりに世紀転換期オーストリアを生きた三者に共通する愛のかたち(超越性)と、三者で相違する愛の位相(水平性の希求の結果)を定位しようと試みた。その試みは高いレベルで成功している。

以下、本論文において特筆すべき点を挙げれば、その第一は構想の大きさである。世紀転換期オーストリアにおける愛の諸相を論じるにあたって、申請者は予めプラトンのエロース論に遡る、ヨーロッパにおける〈精神的な愛〉の系譜を概観する。プラトンからプロティノス、アウグスティヌスを経て12世紀のトルバドゥールに至り、そこからさらにダンテ、ペトラルカ、ニーチェを経て世紀転換期オーストリアの詩人たちに至るその系譜は、たんに本論に入るための序章の役割を果たしているのではなく、たえずその系譜を意識しながらリルケ、ヴァイニングアー、ムージルを論じるという、大きな構図を本論文が描くための条件となっているのである。

特筆すべき第二の点として、そのような大きな構想の下に書かれた論文でありながら、同時に各章で取り上げられるテキストに対してはこのうえなく精密な読解が為されており、その結果いずれの章においても通説を超える解釈が呈示され、これまでのリルケ像、ヴァイニングアー像、ムージル像を覆す新たな像を打ち立てていることが挙げられる。〈所有なき愛〉と呼ばれるリルケの愛の観念については従来その矛盾が指摘されてきたが、申請者は『マルテの手記』で語られる〈愛する女〉の分析を通してその原因がリルケの女性観の分裂にあることを突きとめ、それが〈所有なき愛〉の矛盾のみならず、自然法則に則った性を許容するリルケの曖昧さにもつながっていることを明らかにした。また、ヴァイニングアーはこれまで一般に過激なミソジニストと見なされてきたが、〈精神的な愛〉という新たな視点で『性と性格』を読んだ申請者は、そこに性を嫌悪してエロースとしての愛を求めるプラトニストの姿を、さらにはエロースを批判しつつも完全には否定しきれないヴァイニングアーの揺らぎを見いだしている。そしてムージルについては、主人公である兄妹の近親相姦の有無をめぐって長年議論されてきた『特性のない男』遺稿部の問題に、これまでにない手法と視点を持ち込んで兄妹愛の行方に新たな方向付けを行っている。その手法とは、クラーゲンフルト版を駆使して『双子の妹』をはじめとする過去の草稿をメモ書きに至るまで調べ上げ、それを後の『特性のない男』と突き合わせることによってこれまで不明瞭だったテキストの意味を解読するという手法であり、その結果得られた新たな視点とは、兄妹愛の位相を「肉体的であると同時に精神的」なものと捉え、二人が探究している愛のかたちが「性交に代わる愛の身振り」であると見なす視点である。その視点はおそらく間違っておらず、この方向で遺稿部を順次解読していけば、これまでの近親相姦の有無とは異なる次元で兄妹愛の真の姿を解明することもできるであろう。

このように、リルケ、ヴァイニングアー、ムージルのいずれについても学問的に卓越した成果をあげており、また結語では、最終的にこの三者の関係について、女性を自

然と同一視したリルケが性の拒否も水平性の希求も徹底できず、性の拒否を徹底したヴァイニングが超越性と水平性の二極に引き裂かれたのに対し、妹アガーテを兄ウルリッヒの対等なパートナーとして描いたムージルは超越性と水平性を兼ね備えた愛を構想できたと結論づけていることから、本論文が博士学位請求論文にふさわしい独創性と構成上の堅実さを有していると言える。読後、本論文で考察される愛がユートピア的な志向に偏り、現実生活との関わりを無視しているのではないかという疑問が残らないでもないが、それも本論文の設定した枠組みを越えることであり、本論文が博士論文としてきわめて高い水準にあることを否定するものではない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和7年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降